共同運営部門：薬剤管理センター

＜スタッフ紹介＞

役　　職	スタッフ名
センター長 兼診療局長兼産婦人科部長 兼周産期センター産科医療センター長 兼医療安全管理室長	荻田　和秀
副センター長 兼薬剤部門長	深津　祥央

＜関連部署＞

部署名	部署名
薬剤部門	診療局
検査・栄養部門　臨床検査	看護局
総務課	

＜特色と概要＞

2020年から、薬剤科の運営および薬剤師の業務に関する部局として立ち上がり、2023年度からは他部門と協調し、薬剤管理を含め、病院全体に薬剤部門としての機能を発揮するために活動している。

毎月開催する薬剤管理センター運営委員会で他部門における薬剤関連の課題を抽出し検討している。

＜実績＞

・8月末に烏野隆博センター長が退任され、9月より、荻田和秀先生がセンター長に任命された。

・期限切れ廃棄、破損及び調製後の処方変更等で廃棄となる医薬品の集計を今年度から当委員会でも審議することとした。病院幹部からの意見を踏まえて廃棄減少策の立案を行い、薬剤部門を中心に、関係病棟・診療科・委員会と協力して改善に向けた取り組みを行った。

・各病棟・部門の定数配置薬の管理状況の改善、定数の適正化(減少)、期限切れ廃棄金額の減少について、成果をまとめ、院内TQM活動に報告した。

・退院処方・外来院内処方出力時にお薬手帳シールを自動発行し、全ての患者に渡す運用に変更した。(患者の薬歴管理ならびに保険薬局との情報連携推進に貢献)

・管理対象外の冷蔵庫から期限切れのプロポフォールが発見された事案に対応して、全ての配置部署で院内の「ハイリスク医薬品取扱手順」に則った管理がなされているかを確認し、鍵付き保管庫での管理に統一した。

・ポリファーマシー対策の取り組みについて、薬剤総合評価調整加算の要件になっている業務手順書を新規に作成した。また、10月に多職種の院内勉強会を開催した。

・周術期に休薬を考慮する糖尿病薬の確認について、関係部門と調整し、BG系薬の休薬は手術2日前、SGLT2阻害薬の休薬は手術3日前と院内で基準を決め、患者サポートセンターの入院前支援の運用フローに載せて対応を開始した。

・持参薬管理について病院の方針、運用面・安全面を考慮して、持参薬使用条件など現状に沿った持参薬管理マニュアルに改訂した。

・電子カルテシステムに関連する薬剤インシデントについて、2021～23年の発生事例より薬剤部門で頻度や影響度を評価した。今後、システム改修の要望を出すこととした。

・TAVI入院患者の内服薬指示チェックについて、患者サポートセンター入院前支援に追加して対応を開始した。

院内の医薬品供給管理に関して、以下のルールや書式の見直しを行った。

・注射薬払い出し時のバーコードラベル添付方法を整理し、病棟で1施用毎のまとまりを認識しやすい形態とした。

・指示簿が紙ベースであった時代に作成された薬剤師によるオーダー代行入力の取り決め事項を廃止した。

・医薬品の使用状況を把握するために臨時薬品伝票に患者IDや請求理由などの記載欄を追加することとした。

・薬剤部門の水薬調剤ルールの年齢による違いをなくした。

・注射箋と薬品ラベルに予め登録した薬品コメントを印字できる機能を追加した。(調剤・監査の効率化、投薬時の間違い防止に貢献)

・定数配置されている麻薬の使用・処方箋発行・補充について、定めた時間までに麻薬処方箋が発行されておらず、補充業務が滞るため、時間厳守を依頼した。

・手渡し薬品管理台帳に空バイアル数の記載欄等を追加し、筋弛緩薬、非麻薬性鎮痛剤使用簿の統一化を行った。

＜今年度の反省と来年度への抱負＞

1. 各部署の意見を吸い上げて、薬剤師として介入する専門業務を増やし病院全体的に利便性のある業務改革ができた。これには薬剤助手の人員導入も一助となっていることから、今後も有益性を考慮したうえで、数名の増員を考えたい。
2. フォーミュラリー(有効性、安全性、経済性の観点から作成する医薬品集および適正使用指針)立ち上げを考慮していたが、まだ手を付けていない状態であり、時期を逸することなく進めていきたい。